

算数 第3学年 学びのとびら

授業の設計図

元にした物：小学校学習指導要領（平成29年告示）の原文と、国立教育政策研究所の学習評価の参考資料。教科書の本文・問題・挿絵は入れていません（先生が入れる欄）。東京書籍「新編 新しい算数」令和6年度版の公表年間計画に対応。時期：4月中旬。教科書固有の問題文・図版は転載していない。

この単元で子どもが最後にできるようになること

到達点は「既習の方法を取り出し、解決の根拠を説明する」ことである。児童が「具体物や図に戻ると、計算手順の理由を確かめられる」という根拠を、自分の操作や記録に結び付けて説明できる状態を目指す。本時の課題「前学年で使った計算方法を選び、図と式を対応させて説明する」は、予想と確認結果の違いを扱い、方法を選ぶ理由を話し合うために置く。教師は解決の速さだけで進度を判断せず、説明の中で何を根拠にしたかを確かめる。

学習指導要領のどこに書いてあるか（原文）

学習指導要領の項目	原文
〔第2学年〕の目標(1)	(1) 数の概念についての理解を深め、計算の意味と性質、基本的な図形の概念、量の概念、簡単な表とグラフなどについて理解し、数量や図形についての感覚を豊かにするとともに、加法、減法及び乗法の計算をしたり、図形を構成したり、長さやかさなどを測定したり、表やグラフに表したりすることなどについての技能を身に付けるようにする。
〔第2学年〕の目標(2)	(2) 数とその表現や数量の関係に着目し、必要に応じて具体物や図などを用いて数の表し方や計算の仕方などを考察する力、平面図形の特徴を図形を構成する要素に着目して捉えたり、身の回りの事象を図形の性質から考察したりする力、身の回りにあるものの特徴を量に着目して捉え、量の単位を用いて的確に表現する力、身の回りの事象をデータの特徴に着目して捉え、簡潔に表現したり考察したりする力などを養う。
〔第2学年〕の目標(3)	(3) 数量や図形に進んで関わり、数学的に表現・処理したことを振り返り、数理的な処理のよさに気づき生活や学習に活用しようとする態度を養う。

単元の目標

具体物や図に戻ると、計算手順の理由を確かめられることを理解する。既習の方法を取り出し、解決の根拠を説明することができる。解決の根拠を確かめ、他の方法との比較を通して自分の説明を見直そうとする。

評価規準（3観点）

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
①具体物や図に戻ると、計算手順の理由を確かめられることを理解し、課題に応じた操作や表現を用いている。	①「具体物や図に戻ると、計算手順の理由を確かめられる」を、用いた具体物・図・表・式のうち課題に必要な表現と対応させて説明している。	①自分の方法を確かめ、交流で得た見方を使って説明や解決方法を修正しようとしている。

単元の流れ

公式の単元配当は1時間。各次の配分と第1時の位置は本資料の提案であり、公式細案の転記ではない。

次	時	学習活動	評価規準（評価方法）
第1次	1 （第1 時が本 時）	○既習の方法を取り出す。 ○方法の理由を説明する。 ○別の表し方と比べる。 ○本時の中心課題：前学年で使った計算方法を選び、図と式 を対応させて説明する。	思①（説明と確かめ方）



本時の案

本時の目標：既習の方法を取り出し、解決の根拠を説明することができる。

段階	学習活動（○主な発問） ・予想される児童の反応	指導上の留意点（◎評価）
導入 （ 分）	○前学年で使った計算方法を選び、図と式を対応させて説明する。 ○「まず何をそろえたり、何に注目したりすると確かめられそうですか」 ○自分の予想と、その理由を短く記録する。 【めあて】既習の方法を取り出し、解決の根拠を説明する。 〈予想される児童の反応〉 ・手順を言えば理由を説明したことになると思う。 ・見た目や答えだけで決めず、確かめる方法が必要だ。	・提示する具体物や資料は授業前に教師が確認する。実測を伴う課題では測定結果を事前に決めつけない。 ・予想の違いを残し、正しい考えだけを先に紹介しない。 ・教科書を用いる場合は自校の掲載箇所を確認し、この資料へ固有の問題文を転記しない。
展開 （ 分）	○前学年で使った計算方法を選び、図と式を対応させて説明する。 ○一人で確かめた方法を記録し、根拠となる箇所を示す。 ○「『手順を言えば理由を説明したことになる』という考えは、どこを確かめると判断できますか」 ○「確かめる前と後で、説明のどこが変わりましたか」 ○友達と操作や説明を照らし、同じ結論でも確かめた根拠を具体物や図、式の該当箇所で示す。違いがある場合は、条件や対応を確かめ直す。 〈予想される児童の反応〉 ・具体物や図に戻ると、計算手順の理由を確かめられる。 ・はじめの考えでは、そろえる条件を見落としていた。 ・友達の説明と自分の記録を照らし、対応する箇所を確かめている。	・想定するつまづきは「手順を言えば理由を説明したことになる」である。 ・支援として、どの図の部分か式の数に当たるかを結ばせる。 ・支援後は別の例でも本人が説明できるか確かめ、教師の言葉を復唱しただけで理解と判定しない。 ・説明が進んだ児童には、条件を変えても同じ方法が使えるかを問い、使える範囲を考えさせる。 ◎思① 「具体物や図に戻ると、計算手順の理由を確かめられる」を、用いた具体物・図・表・式のうち課題に必要な表現と対応させて説明している。（発言・操作の説明・ノート）
まとめ （ 分）	○初めの予想に戻り、確かめた根拠を付けて説明し直す。 【まとめ】具体物や図に戻ると、計算手順の理由を確かめられる。 ○次に同じ方法を使えそうな場面、またはまだ確かめたいことを記す。 〈予想される児童の反応〉 ・「手順を言えば理由を説明したことになる」と考えたが、確かめると違いが分かった。 ・何を根拠にしたかを示すと、説明が伝わりやすくなった。	・まとめの文の書き写しだけで終わらせず、自分が使った根拠を添えさせる。 ・口頭、指さし、操作の記録も使い、書く速さと理解を混同しない。 ・態度は単元を通した説明や方法の修正から捉え、挙手の多さでは判定しない。 ◎態①（予想と修正後の記録の比較）

板書の構造

上段：めあて「既習の方法を取り出し、解決の根拠を説明する」。

左：課題「前学年で使った計算方法を選び、図と式を対応させて説明する」と児童の予想。
中央：実際に確かめた操作や図・表・式を、必要なものに絞って配置する。根拠となる箇所を印で示す。
右：「手順を言えば理由を説明したことになる」という考えと、確かめた結果を並べる。
下段：まとめ「具体物や図に戻ると、計算手順の理由を確かめられる」。初めの説明から変わった点を記す。

つまづきやすい所と手当て

想定するつまづきは「手順を言えば理由を説明したことになる」である。用語の理解、数量や図形の対応、操作の手順のどこで困っているかを観察する。具体的な支援は「どの図の部分が式のどの数に当たるかを結ばせる」こと。支援後に本人が説明できるかを確かめる。書くことが難しい児童には操作や指さしを使い、理解が進んだ児童には条件を変えた場合の成立を考えさせる。交流の後は必ず個人の説明へ戻り、考えがどう変わったかを記録する。

プリントの案

根拠を確かめる記録

課題「前学年で使った計算方法を選び、図と式を対応させて説明する」、初めの予想、確かめた方法、根拠の箇所、説明し直した文の欄を設ける。課題に必要な図や表を児童が書き込める余白を取る。

説明を見直す記録

初めの説明、友達の方法と比べて気付いたこと、修正後の説明を並べる。教科書の問題や図版を複写せず、児童自身の記録を使う。

出典：小学校学習指導要領（平成29年告示）算数（https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/1384661.htm）／東京書籍 年間指導計画作成資料（公式単元・時期・配当）（https://ten.tokyo-shoseki.co.jp/text/shou/sansu/data/sansu_keikaku_saian_3.docx）／国立教育政策研究所 学習評価に関する参考資料 小学校算数（https://www.nier.go.jp/kaihatsu/pdf/hyouka/r020326_pri_sansu.pdf）
AIが作成した授業案です。授業での検証は未実施です。自校の教材・年間計画・学級の実態に合わせて確認してください。



Threads「三重でAI使うなら」(@mie_ai_katsuyo)
https://www.threads.com/@mie_ai_katsuyo

LINEオープンチャット
みえ先生ラボ

